
魔法先生ネギま！ 反逆者の第2の人生

不死鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 反逆者の第2の人生

【Nコード】

N5869Z

【作者名】

不死鳥

【あらすじ】

ゼロレクイエムの後C・Cに異世界にとばされたルルーシュ。降り立った世界はネギまの世界だった。

多少（かなり？）キャラの性格が変わっています。

プロローグ

胸から流れ出た血がその少年の白い服を紅く染め上げている。その少年はもう二度と動かない死体だということが窺い知れる。しかし、その少年に寄り添い死を嘆くものはいない。なぜなら、その少年はつい先ほどまで世界を手中に収め、世界中の憎しみを一身に背負っていた魔王だからだ。

その少年の死体に近づく影があった。緑色の髪をした少年とそう年も変わらないだろう少女だ。

その少女は少年の前に来、口を開く。

「いつまで寝ているつもりだ？」

その声に反応したかのように少年の睫が振るえ、その閉じられた瞼が開く。その瞳は美しいアジメストの色だ。

少年は少女の姿をその目に収めると先ほどの言葉に返答する。

「オレの役目はもう終わった。

その後どうしようがオレの勝手だろう・・・」

「ああ、当初の予定ではそうだった。しかし、そうもいけなくなつた」

「それは・・・どう言う意味だ？」

「民衆は魔王からの解放を全世界に知らしめるため魔王――
つまりお前の死体を探している」

その言葉に少年は愕然とする。

そんな様子の少年に構わず少女は続ける。

「ここももうすぐ誰かが来るだろう。」

そして、ここをやり過ごしてもこの世界に逃げ場は無いだろう」

くだから・・・お前には異世界に行ってもらおう。>

何でも無いことの様に告げられたその言葉に少年の思考は停止した。

1話目

Side あるアリアドネー兵

オレはトールという名だ。

今日は修行の為に人が殆ど入ってこない森に来た。

（さて、今日は何の魔法の練習をしようかな）
そんな事を考えながら、森の奥へ入っていく。

そして、ある程度進んだところで急に眩い光が辺りを包んだ。
思わず目を閉じそのまましばらくして目を開けると、
そこには18歳ぐらいの少年がいた。

その少年からは強い魔力を感じる。

とりあえず、少年に声をかける。

「おい、そこのお前！

今の光はなんだ？お前の目的は？というかお前は誰だ？」

色々と支離滅裂なことを言っている自覚はある。

だが、この少年がこの国に危害を加えないという保障は今の所ない。
警戒するに越したことは無いだろう。

その少年は少し考えるそぶりを見せた後、

「オレの名はルルーシュ。異世界から来た」

と、簡潔に今の問に答えた。

~~~~~

「それでお前は、異世界から来て気づいたらあんなところにいたっ  
てのか？」

目の前の少年―ルルーシュ―を本部に連れて行き先ほど聞いたこと  
をもう一度確認する。

それにルルーシュは

「何度も言わせるな。オレは嘘は言っていない」と答える。

「それは分かってる。

けど、それを信じるやつはなかなかいないだろう」

そのことを指摘するとルルーシュは答えに詰まった。

「まあ、ここは学術都市国家『アリアドネー』だからな。

お前に学ぶ意思があれば、異世界人だろうが何だろうが受け入れ  
てくれるさ。

どうだ、いつそのことここで生活してみるか？」

というオレの提案にルルーシュは

「しばらく厄介になる」

と返答した。

## 補足「コードギアスのストーリー」(前書き)

コードギアスを知らない人の為に書きました。  
知っている方はスルーしてください。

## 補足「コードギアスのストーリー」

大国ブリタニアの皇子として生まれたルルーシュ。

皇位継承権は低いものの、母や妹、異母兄妹たちと平和に過ごす。しかし母マリアンヌがテロリストに殺害され、それに巻き込まれた妹・ナナリーは足を撃たれて歩けなくなり、また精神的ショックで目が見えなくなった。

ルルーシュとナナリーは父である皇帝・シャルルに、弱者として切り捨てられ取引材料として日本に送られる。

そこでスザクと出会い当初は険悪だったもののある事件をきっかけに親友となる。

当時日本はサクラダイトという貴重な資源が大量に発見され世界中から注目されていた。

ブリタニアはサクラダイトを手に入れるために日本に皇子と皇女がいるにも関わらず戦争を開始した。

ナイトメアという兵器日本は敗北する

そのためルルーシュはブリタニアとシャルルに強い憎しみを抱きいつかブリタニアをぶっ壊すという誓いを立てる。

戦争の混乱に乗じルルーシュとナナリーは死んだとブリタニアに思わせ、母の後見であったアッシュフォードに身を寄せる。

ルルーシュは17歳のとき、テロに巻き込まれブリタニアの軍人となっていたスザクと再会する。

その時謎の少女C・C・<sup>シーツィ</sup>に出会い、契約することで『<sup>ギアス</sup>王の力』と手に入れる。

ルルーシュが手に入れた力は『絶対遵守の力』だった。

その力と明晰な頭脳を駆使してブリタニアに反旗を翻す。  
すべては妹の為、そして母の死の真相を知るために・・・

ルルーシュは反逆を当初は一人で行うつもりだったがブリタニアの組織力の前に一度敗北し、組織を作ろうと考える。

日本のテロ組織の一つである『崩グループ』を核として自称正義の味方である『黒の騎士団』を結成。

自ら仮面を被り正体不明の男『ゼロ』と名乗り、ブリタニア人・日本人を区別せず、悪に対する正義を掲げて行動する。

反逆は成功するかのように思われたが、異母妹であるユーフェミアが「行政特区日本」を発表。

黒の騎士団は存在意義を失いかける。

「行政特区日本」の式典直前、ユーフェミアと二人きりでの対話を希望し、その際ギアスをかけ行政特区日本は罠だと思わせようとするが、ユーフェミアの決意に負けを認めた。

しかし使いすぎたギアスがその場で暴走、常時展開状態になっていることに気付かないまま「日本人を殺せ」という言葉を冗談でユーフェミアに発してしまう。

その結果ユーフェミアは会場に集まった日本人を虐殺する。

それを止めるためにルルーシュはユーフェミアを撃ち殺した。

その後、ユーフェミアの騎士だったスザクはゼロの正体を知り捕らえたゼロ（ルルーシュ）を皇帝に差し出し、皇帝直属の騎士『ラウンズ』の一人となる。

ルルーシュは皇帝のギアス＜記憶改変＞にかかり、「皇子であったこと」「妹ナナリーのこと」「ゼロであったこと」を忘れさせられる。

その後、少年口を弟として認識させられC.C.をおびき寄せる餌として監視を受ける。

記憶をなくし普通の生徒としてアッシュフォード学園に通っていた

が、事件に巻き込まれC・Cと再会することで、記憶を取り戻し再び『ゼロ』として反逆を開始する。

ブリタニアに囚われているナナリーの救出をしようとするが、ナナリーなりの考えや意志があると知り、ブリタニアへ反逆する意義を見失う。

だが黒の騎士団もゼロも、すでにナナリーのためだけにあるのではないことを自覚、再びゼロとして立ち上がる。

中華連邦とも手を組み、ブリタニアに匹敵する連合国家・超合衆国を設立。

上手くいくかと思われたが、ブリタニアとの戦いの中フレイヤ（新型核兵器）にナナリーが巻き込まれ、また異母兄シュナイゼルにより素性（皇子であること）とギアスを黒の騎士団にバラされ、粛正されそうになる。

しかし、ロロが命がけでルルーシュを助け、すべての元凶である皇帝を倒すため、一人で皇帝の元へ向かう。

シャルルと対峙し、母の死の真相と実は母もシャルルと同じ考えであったことなどを知り、二人を否定。

シャルルとマリアンヌの計画『嘘のない世界の実現』を阻止。

その後、C・C、スザクとともに「ゼロレクイエム」という計画を立て、行動を開始。

ブリタニアの新たな皇帝として即位、ブリタニアという国を崩壊させていく。

そんな中シュナイゼルと、実は生きていたナナリーと対面。

動揺するものの、ナナリーだけを特別扱い出来ない判断。

シュナイゼルとの直接対決で「ゼロに仕えよ」というギアスをかけることに成功。

自らの意志で目を開けたナナリーとの対話で、ルルーシュと同じ考えであることを知りギアスをかける。

ナナリーに恨まれながらも、悪逆皇帝としての演技を続け、ゼロレクイエムを決行。

ゼロレクイエムとは世界中の憎しみをルルーシュ一人に集め、正義の象徴であるゼロとなったスザクが殺すという計画。

計画は成功。人々は少しずつ、より良い世界になるよう動き始めた。

[illegible]

その後プロローグに続きます。

## 補足「コードギアスのストーリー」(後書き)

大雑把にまとめました。

興味をもたれた方を一度見てみてください。  
とても深いアニメです。

## 2 話 目

Side ルルシユ

『異世界だとふざけているのか?』

『ふざけてなどいないさ。私は大真面目だ。  
説明するための時間はない。』

詳しいことはこのカバンの中に入れた手帳に書いてある』

C・C<sup>シート</sup>がオレにカバンを押し付けると周囲に赤い光が満ちる。  
オレはC・Cに手を伸ばす。

『ならばお前も来い!!』

しかし、C・Cはその手を取らずにオレに事実を告げる。

『これは、一人用だ。私はお前とともに行く事はできない』

オレの困惑に気づかないような振りをしてC・Cはさらに続ける。

『異世界がどんな所かは分からない。』

この世界よりも理不尽が溢れる世界かもしれない。

だが、それでも私はお前に生きてほしい。

私達は不老不死だ、いつか会えることを祈っているよ』

では、さよならだ。

その直後、世界が赤い光で満たされた。

~~~~~

気がつくと、知らない天井が見えた。

突然のことに驚いて跳ね起きるが、昨夜トールの家に泊まったことを思い出し、先ほどの夢だったことに思い当たる。

（あの世界と別れる時の夢とは随分な悪夢だ・・・）

部屋を出て、階段を降りるとそこには朝食を用意しているトールがいた。

声をかけ朝食の準備を手伝う。

朝食が終わると、アリアドネーの学校に通うための手続きに向かう。

名前をきかれ『ルルーシュ・ランペルージ』と答えた。

別に本名の『ヴィ・ブリタニア』という名字が嫌なわけではないが、一番耳になじんだこの名前を使いたかった。

学科選択では「魔法学」を選択した。

幅広い知識と応用力が求められる学科だそうだ。

登校は一カ月後、それまでトールの家で魔法についての基礎知識と実践を学ぶ事になるそうだ。

2 話目（後書き）

ちなみにカバンの中には
手帳・食料・銃・アルバム（写真いり）
が入っています。

アルバムは何時撮ったといえる写真がまぎれています。
例）男女逆転祭・ゼロレクイエム・幼いころの写真 等

3 話目（前書き）

アンケート

ルルーシュの始動キーを考えてください

締め切りは 12月24日 AM10:00までです

3 話目

S i d e ルルーシュ

さて、突然だがオレがこの世界に来てからもう5年がたった。

いきなり時間が飛びすぎだとかは言わないでくれ。

オレは先ほどアリアドネーの卒業式を終わらせ、これからはアリアドネーで非常勤の教師として働くことになっている。

今はトール家でパーティーが行われている。

参加者二名ではパーティーとは言わないかもしれないがな・・・

「しっかしまあ、座学も実践もほぼ完璧とはな・・・お前本当に魔法を知らなかったのか？」

「魔法も科学も大して変わらないさ。

基本さえ理解すれば後はその応用だからな」

そう返すと、トールはなんだか微妙な顔をしていた。

「まあ、非常勤だが教師になるんだ。

生徒に悪影響を与えるようなことはするなよ」

「分かってる」

アリアドネーに非常勤の教師はザラにいる。

その殆どが自分の研究に没頭したいからという研究者たちだ。俺もそんな研究者の一人だがな。

身元の保証としてアリアドネーの教師になったがオレに対する仕事はない。

完全に名前だけだということだ。

実質オレはフリーの魔法使いということだ。

「それで、お前がアリアドネーを出て行くって聞いたからよ、最後にオレからの餞別だ」

そういつてツールは一つの魔法球を渡してきた。

「これは、オレが祖母ちゃんの形見なんだがな・・・
オレよりもお前が持っているほうがいいって思ってたよ。
だから、やるよ。大事に使え」

「そんな大事なものの、貰えるわけないだろうが!!」

そういつて魔法球を返そうとするが

「俺が持っていてどうせ使わないだろう。
どこかに売ってしまおうとしても、知らない誰かよりも
大事に大事に使ってくれるって信頼できるやつに渡したい。
だから、受け取ってくれ」といわれる。

そこまで言われれば受け取らないわけにはいかない。

「ありがとう。大事に使う」

「当たり前だ」

それから、騒いで朝になるとそのまま荷物を持ってツールの家を出

た。
世界を見て回るために・・・

アンケート（前書き）

以前行ったアンケートに回答がなかったのもう一度アンケートをします。

アンケート

アンケート

1 ルーシュの始動キーを考えてください

2. ルール・シューのアーティファクトの名称・能力等を決めてください

I

1と2どちらか片方だけでも回答してください。

期限は今年いっぱいの予定でしたが、回答が殆どないため1月10日まで延期させていただきます。

特に1番の方を優先して解答してください。

よろしく願います。

以下は文字稼ぎです。

~~~~~

## アンケート（後書き）

3話についてのご指摘ありがとうございました。

私のイメージでは

ナイトメアに乗れる「運動神経がいい」のに

ルルーシュ「かなりの運動音痴」となっていました。

恐らく周りの人たちがトツプクラスだったからなのでしょう。

修正しておきました

#### 4 話目（前書き）

アンケートにご協力頂きありがとうございます。

ルルーシュの始動キーは「ルワ・リュイ・アン・オールドル」となりました。

アーティファクトについては後日小説内で発表させていただきます。

## 4 話 目

Side out

嘗てルルーシュがいた世界に酷似した世界・・・旧世界。

違いはブリタニアという大国が存在せず、それに伴いブリタニアの植民地であった国が自由を手に行っているということ。

そしてルルーシュは今、日本の『麻帆良学園』というところにきている。

世界最大級の学園都市であり、関東魔法協会の拠点でもある。

今この学園では『麻帆良祭』という物が開催されているが、今年の祭りは例年よりも格段に人が集まっているらしい。

その理由はこの学園の何処からでも見渡せるほどの大きさがある『世界樹』という木のためだ。

この木は毎年、学園祭最終日に仄かに発光するが、22年に一度更なる大発光をするらしい。

その大発光は今年起こるため、それを見ようと大勢の人々が集まってきているそうだ。

『世界樹大発光』とは世界樹が大量に放出する魔力が一般人にも視認できる程の量だということらしい。

## S i d e     ルルーシユ

世界樹の放出する魔力、その大量の魔力は世界をも揺るがす可能性がある……か。

世界を揺るがせるほどの力が存在するというのなら、もう一度だけ――ほんの一瞬だけ――でもいい、あの世界に戻ることができないだろうか。

（そんなことを考えるのは無意味だ。

感傷に浸るなんてオレらしくもない……）

そんなことを考えていると、いつの間にか大発光の時間になったのか、辺りに光が満ちる。

その光はオレの目の前に光のドームを形成した。  
光のドームは徐々に薄れていく。

そして、光のドームが消えた後には一人の少女が姿があった。

嘗てあの世界で『共犯者』であつた存在……  
その姿は夢でも、幻でもなく、現実のものとしてそこにいた。

その姿を見たオレは呆然とし、無意識のうちにその少女の名前を呟いた。

「C・C・Cと・・・」

## 5 話 目

S i d e   o u t

「<sup>シー</sup>C・C……?」と

目の前の少女の名前を呟いてはみたもののルルーシュにはそれが正しいのかすら判断できずにいた。

なぜなら目の前の少女は本来ならここにいるはずが無い存在だからである。

その少女の方も驚愕に目を見開きルルーシュの方を凝視している。不意に少女が口を開く。

「何故お前が……? いや、それよりもここは……?」

困惑もあらわに吐き出された言葉はルルーシュに目の前の少女が自分の知っている存在であることを確信させる。

「お前はオレの知っているC・Cでいいんだよな……?」

その問は確認の形をとってはいるが、ルルーシュはそう確信していた。

少女もその問いを肯定するかのよう

に「何を寝ぼけたことを言っている。私の顔を忘れたのか?」  
と言い放つ。

その言葉がもつ傲慢な響きは確かにルルーシュが良く知るものだった。

ここは何処だ？というＣ・Ｃの質問に答えようとしたルルーシュの言葉はいきなりの怒鳴り声に掻き消されてしまう。

「貴様等ここで何をしている！！！」

声がした方向を見ると麻帆良の者であろう十数人の魔法使い達がいた。

ルルーシュはＣ・Ｃに「お前は何かしゃべるな。黙っている」と自分達にだけ聞こえるように囁くと、魔法使い達に向き直り自らの身分を示す。

「オレはアリアドネーで研究をしているルルーシュ・ランペルージというものだ。

この辺りで強大な魔力を感じ、気になって調べに来たところだ」

それから・・・とＣ・Ｃを示し、

「彼女はオレの友人だ。潔白はオレが証明しよう」といった。

その言葉を聞き魔法使いからの警戒がなくなっていく。

ここにいる魔法使い達の代表らしき男が出て来ると

「我々としても今回の事態を放置することはできない。

事態の把握のためにも協力してくれないか？」

S i d e   ルルーシュ

協力してくれないか？か、どうせ拒否権は認められないのだろう・

「事情聴取というわけか・・・オレだけなら構わない」

「何故？」

詳細を知るために二人から話を聞きたいのだが」

代表の男が纏う空気が変わる。

それに伴い他の魔法使い達から疑いの視線が向けられる。

「彼女は一ヶ月ほど前に魔法世界で倒れているのを見つけたんだが・  
・

魔法の事を含めすべての記憶を失っているらしい」

だからC・C・に聞いても無駄だ。と、言外に告げると男は納得したようだった。

関東魔法協会長

「では、この長のところに連れて行くのでそこで君の知っていることを報告してくれるか？」

「手短になら、構わない」

色々と気になることはあるが、それよりも報告とやらをさっさと済ませてしまおう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5869z/>

---

魔法先生ネギま！ 反逆者の第2の人生

2012年1月11日10時51分発行